二

豊前小倉から、筑前・筑後と肥後の長崎への街道の基点である小倉城下に坂崎磐音と薬売りの彌助が到着したのは、昼下がりの刻限だ。

二人は城下と町家を分かつ紫川に架かる常磐橋に立って、小笠原氏の居城を眺め上げた。

＜此処は九州の咽喉なり。川口に番所ありて出入り舟の人数切手を改む。川に入て一町計り行けば橋あり……。橋を渡れば見附番所あり。これより内は城内にて縦横の町あり。天守高々と見ゆ。いと賑わしき城下なり＞

後年、この地を訪れた名古屋商人の記した『築紫紀行』の一節だが、当時もこの記述のままの光景が広がっていた。

野面積みの石垣、五層の天守閣は、唐造りの天守と呼ばれ、四層よりも五層目の方が張り出して造られていた。

豊後小倉の礎を築いたのは、関ヶ原の戦いで勲功を立てた細川忠興である。家康はその勲功に報いて、豊前一国と豊後の一部、三十九万九千石を与えた。

家康は、関ヶ原の戦いで西軍側に与した周防・長門の毛利輝元を監視する役目として忠興を小倉に配した。

忠興は紫川の地の利を利用して、四重五重の堀を造り、水門を備えた小倉城を建設した。

寛永九年、細川家は小倉から熊本に転封になり、小笠原忠真が十五万石で入封して、小倉の繁栄を促した。

二人は常磐から振り仰ぐ城の主は、四代の小笠原忠総の時代である。

「旦那、世話になりましたな」

上方へ戻るという彌助が別れの挨拶をした。

「縁あればまたどこぞで会おう。さらばじゃ」

「旦那も」

彌助は肩に背負った薬箱をひと揺らしすると、馬関海峡を渡る船着場のある紫川左岸河口へと去っていった。

独り残された磐音は再び東町から、御城を中心にした西町を見た。

侍屋敷は、東に三百二十四余軒、西に二百八十余軒、東西の組屋敷九百余軒、総計千五百余軒、家中の者三千人が住み暮らしていた。

これに対して町人は、東五十八町六千七百余人、西二十町三千六百余人を数えた。

彌助が向かった紫川河口には、長門へ渡る船宿や旅人宿が軒を連ね、常盤橋口には、参勤交代や長崎に赴任する奉行、役人たちが定宿とする本陣などが設けられていた。

譜代大名の小笠原忠真は、

「豊前国は九州要衝の地たるにより鎮護すべき旨……」

を将軍に命じられて赴任したという。

小倉藩には、福岡黒田藩、薩摩藩など外様の雄藩を監視する役があった。それが九州探題と称せられ、城下の賑わいを醸し出してもいた。

（さてどうしたものか）

懐には長崎の筆峰神仙が書いてくれた、小倉藩の藩医市村草達への紹介状があった。藩医となれば、侍屋敷のある西町住まいだろう。

磐音は、気楽な町家のある東町の海沿いへと足を向けた。すると雰囲気ががらりと変わった。天秤棒に荷を振り分けた八百屋が走り、頭の上に飯台を載せた女魚売りが呼び声を上げて往来する。

生き生きとした庶民の町が広がった。

磐音は腹が空いているのに気がついた。深川住まいの勘を頼りに行くと、飯屋や飲み屋、小店が軒を連ねる活気のある船頭町に出た。

磐音は人足たちが立ち寄りそうな一軒の飯屋に入った。侍の姿はない。

「おいでなせえ」

小僧がぼそりと磐音を迎えた。

「飯を食したい」

「へえっ、今日のおかずは、いわしの糠味噌煮に大根の煮付け、さよりの吸い物ばい」

「それでよい」

磐音はまず背の風呂敷包を解くと、土間に置かれた縁台の傍らに備前包平と一緒に置き、腰を下ろした。

昼餉の刻限を過ぎ、店は半分ほどが埋まっているだけだ。どこかのどかな雰囲気もある。

磐音は飯が運ばれてくる間にこれからの段取りを考えた。

まずは旅籠を探し、岩田屋善兵衛の妓楼を旅籠の番頭あたりに聞くことが先決だろう。彌助の情報が正しければ、簡単に話がつく相手でもなさそうだ。それに善兵衛が話を受けてくれたとして、磐音には奈緒を請け出す金子も足りなかった。

長崎の西國屋次太夫から半ば強請り取った百五十両にはすでに手をつけていた。

金の算段をしなければならない。それも何百両という、未だ磐音が手にしたこともない大金が要るのだ。

「お侍さん、相席させてもらっていいかしら」

女の声が降ってきて、磐音は顔を上げた。いつの間に店に入ってきたのか、編笠をかぶり三味線を抱えた鳥追いが立っていた。江戸訛りだ。

「かまわぬが」

女は編笠を脱ぐと、助かったと言った。

三十前の年増だが、なかなかの美形で艶っぽい姿態をしていた。

「いやね、商売しようと町に出たんだけど土地のやくざに付きまとわれて、この店に入り込んだのさ」

「姐さんならば、その気持も分からぬではないな」

「旦那、江戸の人だね」

「生まれ在所は西国だが、ただ今は江戸の深川住まいだ」

「深川のどこですね、懐かしいわ」

「六間堀の裏長屋の住人だ」

「驚いた。あたしは北森下町さ」

「なんと隣町か」

「あたしは、鳥追いのおまつっていうのさ。深川の住人が二人して小倉くんだりの飯屋で会うなんて、なにかの縁だね」

小僧が磐音の飯を運んできた。

「小僧さん、あたしとこの旦那に酒をおくれな。茶碗でいいよ」

磐音の注意は膳にそそがれていた。

「昼酒は飲まぬ。腹が減っておるので先に失礼するぞ」

なんだ、付き合っちゃくれないのという女の言葉を聞き流した磐音は、箸を取り上げた。

さよりの吸い物がなんとも美味しかった。

磐音は黙々といわしの糠みそ煮、大根の煮付けを菜に麦飯を食べた。こうなれば、だれが言葉をかけても磐音は答えない。食べることのみに専念して、まるで子供だ。

鳥追いのおまつは、呆れたように磐音の食いっぷりを見ながら、運ばれてきた茶碗酒をぐいぐいと飲んだ。

「馳走であった」

きれいに平らげれらた膳を前に磐音が満足の笑みを浮かべた。

「こんなにも飯屋の煮付けを美味しそうに食べる侍なんてみたことないよ」

「酒の味はいかがかな」

「お侍さんのおかげでつまみ入らずさ」

「それは重畳」

おまつは小僧に代わりの酒を頼み、磐音は茶を貰った。客は先ほどより減っていた。

「おまつさんは、小倉に用事で来られたか」

「小笠原様の中間の口車に乗せられて西国まで流れてきたのさ。なあに、小倉に来れば所帯を持つなんて、甘い話にこのあたしが乗るなんざあ、焼きが回ったかねえ。それとも年を食っちまったかねえ」

おまつが自嘲した。

「旦那はどうなんだい」

と訊き返した。

「それがしは野暮用だ。岩田屋善兵衛という妓楼の主に掛け合いだ」

ふーんと鼻で返事をしたおまつが、

「近頃落ち目の旦那だろ」

「噂を聞いたか」

「なんでも赤間の親分に痛めつけられて、慌てて腕の立つ浪人なんぞを集めているという話じゃないか。お侍も用心棒に雇われるなら、勝ち組に乗ったほうがいいよ」

「おもしろい話を聞かせてもらったな」

磐音は、懐の巾着から小銭を出すと飯代を払った。

「ようやく知り合いになれたというのに、もう行くのかい」

鳥追いのおまつも小僧の持ってきた茶碗酒をくいっといっきに飲み干し、飲み代を投げ出すように払うと、磐音について店を出てきた。

「おまつさん、どこぞに気楽な旅籠は知らぬか」

「船頭町界隈は旅人宿ばかりだ、いくらでもあるよ。おいでな」

おまつの誘いに乗った。

おまつが連れて行ったのは、自分も泊まっているという旅人宿の末広屋だ。

旅の者が着くには早い刻限だ、部屋は空いていると、帳場に座った番頭が言った。

「おまつさん、助かった」

「あたしゃ、一稼ぎしてくるよ」

と玄関先で再び町に出て行くおまつを見送り、磐音は二階の古びた部屋に通った。案内してきた番頭に岩田屋善兵衛の見世を訊いてみた。

「旦那、用心棒になるんなら、やめとかんね。善兵衛旦那は、悪あがきをしとらすたい。赤間の唐太夫親分に見世ば乗っ取られるともたい、間近じゃろうね」

番頭はおまつと同じように磐音を用心棒志願のものと見たようだ。

「見世はどこかな」

「京町の、永照寺裏に行きゃあくさ、分かろうもん」

と言った番頭は、磐音の腕前でも確かめるように、頭から足先まで睨め回し、

「命あってん物種たい。怪我してんくさ、馬鹿らしかろうもん」

と重ねて注意した。

「番頭どの、手紙を書きたいのじゃが、筆と硯を貸してはくれぬか」

「ほんなら下ん帳場に来んね、それが早かろ」

番頭が降りていったあと、背にしていた風呂敷を下ろし、旅に焼けた道中羽織と袴を脱ぎ、備前包平と脇差を帯から抜いた。

風呂敷には小型の手行季が収まっていた。

元々磐音には、旅の最中に持ち運ぶ用具とてない。大事なものは、長崎で手に入れた小判と奈緒の描いた白扇くらいなものだ。だが、手拭い、下帯の替えくらいは手行季に入れてあった。

丁寧に畳んだ羽織と袴で手行季を包み、さらに風呂敷で包み込んだ。

懐には当座の路銀が残っていた。

磐音は包みを下げると帳場に下りた。すると番頭が穂先のちびた筆と硯などを用意していた。磐音は二晩の旅籠賃を前払いした。

「これは丁寧なこったいね」

「番頭どの、すまぬが、この荷をそれがしが発つまで預かってはくれぬか」

「だれにでん触らえもしまっせん」

旅籠賃を前払いしたせいか、番頭は胸を叩いて風呂敷包みを預かった。

磐音は帳場のかたわらで、江戸米沢町の両替商、今津屋の老分の由蔵、本所北割下水の御家人の次男坊品川柳次郎、六間堀北の橋詰の鰻屋宮戸川の主の鉄五郎、長屋の大家金兵衛に宛ててそれぞれ手紙を認めた。

五月の二十八日に江戸を発ったとき、三月で江戸に戻ると言い残してきた。だが、もはやふた月は過ぎて、この先どうなるか分からなかった。そこで江戸の知り合いや大家や友に、関前での事件の経緯と、その後のよんどころない事情を書き送ったのだ。

四通の手紙は、今津屋の老分由蔵宛ての表書きに包み込んだ。今津屋に届きさえすれば、あとは由蔵が割り振りをつけてくれよう。

手紙を認め終えたとき、旅籠の外は夕暮れが迫っていた。

「番頭どの、長いこと邪魔をしたな。お陰で懸案の手紙を書くことができた。飛脚屋を教えてくれぬか」

「紫川の大橋ば渡ってくさ、向こう岸の船着場に行きなっせ。そん前にでんと飛脚屋が何軒も口ば開けとるたい」

磐音はいったん部屋に戻ると、包平と脇差を差し落とした着流しで再び玄関に下りた。

「行ってきなっせえ」

番頭の声に送られ、番頭が大橋と呼んだ常磐橋を渡ろうとした。

「おや、旦那、どちらへ」

夕暮れの光の中、おまつが立っていた。

「まずは飛脚屋に参る」

「あたしも行こうと」

おまつが肩を並べてきた。

「商いがどうであったな」

「太鼓祇園があった七月まではなんとか稼ぎになったけどさ、祭りが終わるとどこも駄目だねえ」

「江戸には帰らぬのか」

「仲間にさ、大名家の家臣の嫁に入るなんておおぼら吹いてきた手前、このままじゃあ、帰りにくいわね」

橋を渡ると確かに飛脚屋が何軒も軒を連ねていた。

磐音は人の出入りが多く活気のありそうな一軒の飛脚問屋に入った。

「すまぬが、江戸まで書状を願いたい」

「はいはい、江戸と言いなはるな、片道二十五、六日ば見てくだせえ。それに金もかかりますばい」

「仕方あるまい」

日にちはともかく飛脚代は覚悟してきた。

「御三家の七里飛脚や継飛脚とは違いますたい。通し飛脚は、宿場つなぎでございますもんでな」

「頼もう」

と磐音が分厚い書状を番頭に渡すと、表書きを見た番頭が、

「おや、お侍さんは、江戸の両替屋行司の今津屋様と知り合いな」

と顔色を変えた。どこか改まった風情である。

「そなた、今津屋を存じておられるか。それがしは、今津屋の主の吉右衛門どのとも老分の由蔵どのともいささか知り合いでござってな。なるべく急ぎで届けたいのだ」

のどかに言う磐音も江戸暮らしで如才なくなっていた。

「今津屋様は御家中と関わりがございますたい」

と応じた番頭は態度を改め、

「明日にも摂津の小倉藩屋敷行きの雇船が出よりますたい、そいに乗せまっしょ。そんで、摂津湊から江戸行きの早船に載せた替えますでたい、風具合ではくさ、十五、六日で今津屋様の手元に届きまっしょうもん」

と約束してくれた。

「それはかたじけない。御代はいくらかな」

「藩の御囊に入れますけん。まあ、一分も置いときなっせ」

と破格の値段で請けてくれた。

磐音は遠い小倉までにも聞こえた今津屋の盛名に驚かされた。

今津屋と小倉藩に関わりがあるということは、小倉藩が今津屋から借財を負っているということではないか。とすれば飛脚屋の番頭の態度の変わりぶりも理解できた。

用事を済ませて飛脚屋を出た磐音に、おまつが訊いた。

「お侍さんは、両国西広小路の今津屋さんと知り合いなのかい」

「知り合いといえば知り合い、金子の取立ての用心棒を二、三度請け負ったくらだ」

「呆れたよ。お侍さんは、なんとなく実直なお人かと思っていたら、意外と抜け目がないんだねえ」

「おまつさん、あれは番頭どのの早合点にござる」

「ござるときたか。お侍さん、名はなんというんだい」

「坂崎磐音と申す」

「坂崎さんか。で、これからどちらへ」

二人は再び常盤橋に差し掛かってきた。

「京町の永照寺裏にな」

「あっ、忘れてた！」

おまつが叫んだ。

「岩田善兵衛のところでなんぞ揉め事があったという話だよ。そんなところに乗り込むのかい」

「揉め事か、いよいよ行かねばならぬ」

「なら、あたしが案内するよ」

おまつは気軽な性分か、先に立って歩き出した。